

西日本豪雨災害支援 第5陣(8/7-8/9)、第6陣(8/21-8/23)

県連ニュース

発行所：木原 望
TEL：096-387-2826
FAX：096-381-5442

8月7日～8月9日の3日間熊本から4名で参加しました。支援場所は、広島駅からバスで1時間ほど移動した所にある坂町小屋浦地区でした。この場所は、天地川の砂防ダムが破壊され、土石流にのみ込まれ、700世帯のうち9割が被災し、多くの家が倒壊、半壊、1階部分が土砂に埋まるなどの甚大な被害を受けています。1日目は班毎に分かれてそれぞれ、住民の要望に沿った作業を行いました。私たち4班は、サテライトセンターから歩いて15分位のAさん宅の庭に積んである土砂の除去作業を行いました。6人で作業をしましたが、なかなか土砂は減らず、とても根気のいる作業と感じました。Aさん宅は砂防ダムのすぐ下にあり、被害があった当日は、既に避難できない状態になっていったとの事。サイレンがしきりに鳴っていたが何のサイレンか理解できず、放送していたがその声も雨の音で届かなかつたと話されてました。2日目は、Bさん宅での作業で砂防ダムから下流の方で土砂に埋まった車庫にある車を出してほしいとの希望でしたが、車庫

は倒壊寸前の状態で、ここでの作業は危険と判断され中止となりました。Bさんは仮設住宅の説明会に行ってきたと言って戻ってこられ、玄関の前の土砂を除去してほしいとの事でした。2階建ての家の1階部分は殆ど土砂で埋まり、Bさんもあと少し非難が遅れていたら大変な事になっていたと話されてました。家も周りの土砂をできる限り取り除きたいという思いで作業を続けましたが玄関周辺をきれいにするのがやっとでした。それでもBさんは私たちに「ありがとう」と声をかけてくれました。またその先の住宅では行方不明者の捜索が行われており、心が痛む場面にも直面しました。この間、私たちは自然災害の脅威さらされるたびに、生活を取り戻そうと努力してきました。これは熊本地震でも経験しましたが、生活再建の復旧が遅れ、避難生活が長引くほど、体調悪化が進行していきます。国がやるべき事、早急で丁寧な対応を期待したいです。熊本からは4名でしたが、全国からの呼びかけで多くの人が集まりました。民医連はいつも繋がっていると感じました。これから先、継続的な支援が続くと思います。現場で今何が必要なのかを語り合っていくことも必要ではないかと思いました。お忙しい中、支援に送り出して

頂いた職員の方々に感謝するとともに、支援の間、4人で共に協力し、活動し交流できたことをうれしく思います。ありがとうございました。
八代中央クリニック 小森田 百合子



8月8日から9日にかけて、豪雨水害が起きた広島県坂町小屋浦地区にボランティア活動に行きました。熊本から4名で参加し現地には全国の仲間（民医連）が40名近く集まっていました。広島駅に集合して1時間かけて現地に行きました。車中、被害状況や住民の生活実態、ボランティアの心得について説明を受けました。現地に到着して変わり果てた状況を目の当たりにしました。膨大な土砂の量、土砂で倒壊した家屋、多くの車が大破していました。地元自治会長さんから「みなさん方が来てくれて助かっている。感謝しています」とあいさつを受けました。5人1組で作業しましたが大量の土砂撤去は終わりが見えませんでした。また、熱中症対策から10分作業10休憩が徹底されており、思ったより進まない状況に焦りを感じました。今回ボランティア作業に2日間参加しましたが、私たちは熊本地震の時に多くの方から支援を受けました。今回恩返しも兼ねて参加しました。復興には多くの時間がかかることを再度感じました。引き続き支援していくことが求められると思いました。 たくまの里 作取 久

8月8日、8月9日に広島県の坂町小屋浦でのボランティア支援に参加しました。地震災害のとは違い土砂や泥といったものが家の中にも入り込み、また、1ヶ月経過した今も車が砂に埋まっているのを見て豪雨災害の恐ろしさを肌で感じました。熊本地震とは違い季節的にも真夏で、さらに猛暑が続いていることもあり住民がとても大変な思いをしています。10分作業、10分休憩を守りながら作業をして土砂の移動や玄関先の土砂の撤去などを進めることが出来ました。支援に行き、かえって現地の方が対応に追われるなど、迷惑をかけてしまうかもしれないと考えていましたが、現地の方から「ありがとうございます。本当に助かりました。」等の声掛けがあり、少しホッとしました。求められる支援を継続していく必要があると感じました。 県連事務局 井長 秀典

8月8～9日と広島市坂町小屋浦地区に入りました。災害が起きてから1ヶ月が経とうとしているのにまだ何も出来ない家屋もあり、埋もれた土砂から草が生え始めていたことに衝撃を抑えられませんでした。1日目は庭に集めた土砂を運ぶ作業でしたが、その土砂の山の4分の1程度しか移動させることが出来ませんでした。2日目は車庫から車を出したいとのことで土砂を掻き出していましたが、危険とのことで中止になり、玄関横の土砂を土嚢につめる作業になりました。その作業も全体でいうと5分の1程度しか出来ず、人力での作業量の限界を感じました。しかし、被災された方から「来て頂くことが希望となり、元気がでます。」との言葉があり、やれたことは少しでも、被災者に寄り添えたことは私の人生の宝となりました。余談ではありますがホテルに駐車できずにクリニック駐車場に停めたら2,700円でしたが、警備の方が「まちゃんしゃい。ボランティアにきちよっとじゃろ」とサービスカードを何枚も入れてくれて駐車料金を100円にしてくれました。熊本弁丸出しの作業着でいたことが功を奏しました。

県連事務局 福田圭一郎



8月22日、広島県坂町小屋浦にて災害ボランティアに参加させて頂きました。坂町ボランティアセンターから支援地区の小屋浦小学校へ向かう際、大雨となり予定より遅れての作業となりました。現場では自然の脅威を感じさせられ、被害の大きさと悲惨さを目の当たりにしました。最初に救護テントで活動内容を話して頂いたが、その辺りは災害直後50cm～60cm土砂に埋まっていた所と話されました。民医連が最初に土砂撤去に入った所で、現在は綺麗に土砂が無くなっていました。先の見えない被害状況の中でも少しずつだが前進している事がわかり嬉しく感じました。作業は道端に集められた土嚢をトラックに積み込む事と、混ざっている家庭ゴミを分別して別のトラックに積み込む事でした。積み上げられた土嚢が減るのを見てやりがいを感じました。活動10分、休憩10分が徹底され無理なく作業できました。短い時間の作業でしたが、最後に「民医連の皆さん、ありがとう」と深々と頭をさげ見送って頂いた事に、沢山作業出来なかった事や、台風の影響で2日目が中止になった事がとても残念で悔やまれました。今回の支援に参加し民医連は結束力の強い団体という事を改めて確認しました。引き続き被害者に寄り添った息の長い支援が大切という事を強く感じました。 菊陽病院 施設車輛課 綾戸 雅彦

広島豪雨で被災があったことをマスメディアなどで知り、自分が熊本震災で被災し、全国から支援を受けた体験から、支援活動に参加出来ないかと考えていたところ、職場に支援活動の参加受付の広報がありました。家族に支援活動の参加を相談したところ、快く送り出してもらえらることとなり、職場の上司へ申し出て相談し、支援活動に参加する事になりました。8月21日から22日で広島豪雨水害の支援活動に参加してきました。当初は2泊での支援参加予定でしたが、連続台風19号、20号の接近があり、1泊での支援活動となりました。支援当日に被災地に入った直後とところで、降雨があり近隣を流れる河川には泥流が流れ始めていました。幸い雨はすぐに止み、被災支援所から被災地に支援活動に入りましたが、被災地は視線から下は山土色で染まっており、被災当時の名残がまだ非常に強く残っている様子で、まだ全く手つかずの泥が堆積したままの中にある被災住宅も数多くありました。土嚢や瓦礫を搬送する支援活動を行いました。被災住民の所有品と思われる物も多量に土砂とともに流され瓦礫とともに堆積させている状態であり、被災者の命や日常生活をあっという間に奪ってしまう自然災害の怖さを改めて痛感しました。他のボランティア団体も多く参加されていましたが、まだまだ被災地の現状復帰もままならない状況であり、継続した復興支援活動が必要であると痛切に感じました。同行した下林Drが、支援活動近隣の問診などを行った様子を伺いましたが、精神的な不安を多く抱えている状況であったとのことでした。熊本震災を体験した被災者としては、居住や物資など生活環境の復興と併せて、精神的な支援活動の必要性も改めて痛切に感じました。支援から帰って、周囲のスタッフへも支援活動の参加への声掛けを行っていきたくと思いました。また被災はあってはならないのですが、仮に被災があり、支援活動の機会があれば参加したいと思いました。 菊陽病院 御所 貴博